

# ダニエルの書 - 第百六十九号

預言の糸を解きほぐす：ダニエル書における「要塞」の象徴を読み解く

Jeff Pippenger

2024-03-31

ダニエル書第十一章第十節は、「要害」という語をもって、内的メッセージと外的メッセージとを結び合わせている。それがイザヤの六十五年の預言と結ぶ関連は、外的預言における「要害」をロシアとして示し、また同じ歴史の中でキリストが建て上げる神殿という内的「要害」を示している。第三十一節にある外的要害、すなわち「力の聖所」と特定されるものは、地上の王あるいは王国を表している。内的要害、すなわち内的な力の聖所は、契約の使者が四十六年のうちに建て上げる神殿である。

あの神殿（城塞）の至聖所において、神は天上に座しておられる。

ダニエル書には、いずれも「聖所」と訳される二つのヘブライ語がある。一つは「miqdash」、もう一つは「qodesh」である。「Miqdash」は、異教の聖所を表すことも、神の聖所を表すことも、さらには要害を表すことさえある。「Qodesh」は、聖書においては、神の聖所を表すためにのみ用いられている。ダニエル書第十一章三十一節にある力の「聖所」（要塞）は、「力の聖所」と訳されており、そこで「聖所」と訳されているヘブライ語は「miqdash」であるが、これはローマの都を表しているのであって、それは異教ローマおよび教皇制ローマの歴史の双方におけるローマの力の象徴である。ダニエルは、これら二つのヘブライ語をきわめて慎重に用いた。アドベンチズムの中心的支柱を成す節々において、私たちは「聖所」という語を見いだす。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

両方の節で「聖所」と訳されているヘブライ語は「qodesh」で、神の聖所を表す場合にのみ用いられます。十一節では、異教ローマ、特にローマ市のパンテオン神殿を指して「聖所」という語が見られますが、その節でのヘブライ語は「miqdash」です。

さらに、彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された。ダニエル書 8:11

ダニエル書11章31節の「力の聖所」はヘブライ語の「miqdash」であり、11章7節と10節で「要塞」と訳されているヘブライ語の語と関連して現れる。7節では、南の王はローマの都にまで入り、北の王を捕虜にした。彼がその要塞の中に入ったからである。だが10節では、北の王は「要塞」へと「上って行く」とどまり、自国とエジプトとの国境で立ち止まった。次の節が取り上げるのは、ラフィアの国境である。31節の「力の聖所」とは、その「要塞」の「miqdash」のことである。

ラフィアにおける境界線での戦いは、ウクライナにおける境界線での戦いを象徴している。この預言的歴史は、「頭」が王国または王を指し、それが彼の力の砦であると理解することで認識される。しかし、その預言は内的な真理と外的な真理の双方を扱っている。外的な側面における「力の聖所」は「miqdash」の聖所で表され、内的な側面における力の聖所は「qodesh」の聖所で表される。

1844年から1863年は、十四万四千人の封印を示す預言的歴史の一つの線をなしている。北王国に対する離散の2520年は1798年に終わり、南王国に対する同じ2520年の線は1844年に終わった。これら二つの線は、人間の低次の本性と高次の本性を表している。北王国で表される低次の本性は身体に当たり、高次の本性は頭に当たる。頭は王国の首都であり、王でもある。この比喩のために、キリストはその御名を置くために南王国のユダを選び、その首都はエルサレムである。エルサレムこそ、力の真の聖所が置かれている場所であり、その聖所には、頭である王のための玉座の間がある。

レビ記二十六章の「七つの時」は、1856年における最後の封印の真理であり、旗標がその働きを成し遂げる力を与えるために意図されたものであった。1844年から1863年に至るまで、キリストは御自身の神性を人性と永遠に結び合わせることを意図しておられたが、人性は反逆した。

その時点では、人間の下位の性質を変容させることはおできにならなかった。なぜなら、それは主の再臨の時に起こるからである。その時、主は人類のかしらを神性のかしらと結合させることによって、人間の上位の性質をご自身のかたちへと変容させられる。かしらは王国の首都であった。かしらは王であり、キリストが神性と人性との結合という変容を成し遂げられる時、キリストはエルサレムの聖所、すなわち、キリストが御父と共に座しておられる至聖所において、人性と神性の双方のかしらを結合される。

勝利を得る者には、わたしと共にわたしの御座に座することを許そう。ちょうどわたしも勝利を得て、父と共に父の御座に座しているように。耳のある者は、御霊が諸教会に語られることを聞きなさい。黙示録 3章21、22節

キリストは、（ラオディキア人である）者たちが、主が勝利されたように勝利し（フィラデルフィア人となって）、天において主とともに座らせられると約束しておられる。

神は、キリストにあってその力を働かせ、彼を死者の中からよみがえらせ、天においてご自身の右に座させた。… また、私たちをも共によみがえらせ、キリスト・イエスにあって天において共に座させた。エペソ人への手紙 1:20、2:6

エゼキエルの二本の杖の結合（人性と神性）は、神の力の聖所（qodesh）において成し遂げられる。そしてまさにその時、力の要塞（miqdash）が、ガブリエルがダニエルに理解させるために来た預言、すなわち十四万四千人の封印の時に神の民に臨むことに関するその預言の、内的系統と外的系統の双方を結び付ける預言上の鍵として特定される。キリストはこの働きをミラー派の歴史において成し遂げることを望まれたが、その働きは一八六三年の反逆によって阻まれた。しかし、一八四四年から一八六三年までの歴史は、なおも、その試みられた働きを例証する一つの系統として残っている。

ダニエル書11章10節には、2014年に私たちの預言的歴史に到来した11～15節の内的・外的メッセージを理解するための鍵が含まれている。10節は、十四万四千の改革運動における終わりの時である1989年を指し示しているが、同時に、封印の歴史において2014年を道標として認識できるようにする鍵も含んでいる。

1844年10月22日、契約の使者は、御自らが建てられた神殿に突如として来られた。その道標は、2001年9月11日、第三天使が再び到来し、第七のラッパが再び鳴り始めたことを予表している。そのとき、1840年から1844年までの歴史もまた反復されるべきであった。なぜなら、1840年8月11日に降って来たその天使は、イエス・キリストにほかならぬ御方であり、その御業は、その栄光をもって地を照らすことであったからである。

1840年から1844年もまた、1844年から1863年が2001年9月11日から間もなく到来する日曜法までを表しているのと同様に、2001年9月11日から間もなく到来する日曜法までを表している。ホワイト姉妹は1844年の歴史を十字架の歴史と整合させており、十字架はそれぞれ三年半から成る二つの歴史の分割を表し、その両者は互いに対応している。十字架は、1840年に始まり1844年に終わる先行する歴史と、それに続く1863年に至る歴史とが、封印の期間を表す二つの平行した歴史であることを確立している。

1840年から1844年までの最初の線はフィラデルフィアのアドベンチストの勝利を表し、1844年から1863年までのもう一つの線はラオデキアのアドベンチストの失敗を表している。両者はダニエル書第十章に描かれており、十四万四千人の封印の時のにおける勝利した賢い乙女たちを表すダニエルはその幻を見たが、彼と共にいた者たちはその幻から逃げ去った。

第一の月の二十四日、私は大河、すなわちヒツデケルのほとりにいた。すると私は目を上げて見ると、見よ、亜麻布を身にまとい、腰にはウファズの精金の帯を締めたある人がいた。その体はベリルのようで、その顔は稲妻のように見え、その目は火のともしびのようで、その腕と脚は磨き上げた青銅に似た輝きを放ち、その言葉の声は群衆の声のようであった。私ダニエルだけがその幻を見た。私とともにいた人々はその幻を見なかったが、大きな恐れが彼らを襲い、彼らは逃げ去って身を隠した。ダニエル書 10:4-7。

ダニエル書7章で、ダニエルが猛獣の幻を見た後、ガブリエルがその幻を説明するために来た。

わたしダニエルは、身の内の霊が深く悩み、頭に浮かぶ幻がわたしを悩ませた。わたしは、そばに立っていた者のひとりに近づき、このすべてのことの真相を尋ねた。すると彼は語り、これらの事の解き明かしをわたしに知らせてくれた。ダニエル書 7:15, 16。

ダニエル書8章で、ダニエルが聖所の獣の幻を見た後、ガブリエルがその幻を説明するために現れた。

そして、私、すなわちこのダニエルが幻を見て、その意味を求めていたとき、見よ、人の姿のような者が私の前に立っていた。私はウライの岸の間から、人の声が呼ばわって言うのを聞いた。「ガブリエルよ、この人にその幻を悟らせよ」。ダニエル

8:15、16.

ダニエル書九章で、エレミヤによって示され、モーセの書には呪いであり神の誓いでもあるものとして記されているその年数をダニエルが理解した後、幻を解き明かすためにガブリエルが来た。

そして私が語り、祈り、自分の罪と私の民イスラエルの罪を告白し、わが神の聖なる山のために主なるわが神の御前に嘆願をささげている間に、まさに、私が祈りのうちに語っていると、初めの幻で見た人ガブリエルが、速やかに飛んできて、夕の供え物のところに私に触れた。彼は私に悟らせ、私と語って言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを与えるために出て来た。」ダニエル書 9:20-22.

それゆえ、すべてダニエル書からの三つの証言に基づけば、第十章でガブリエルがダニエルに、終わりの日に神の民に何が起こるかを悟らせるために来たとき、ガブリエルは、ダニエルが見て他の者たちはそこから逃げ去った、女性形の「marah」、すなわち使役的な幻を解釈していることになる。

今、私は、後の日にあなたの民に何が起こるかをあなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日の後のことに関わるからである。ダニエル書 10:14

信者の間に分離を生じさせたダニエルの見た幻は、キリストの顕現の幻、二千三百年の幻であったが、それはその幻の女性的表現であった。契約の使者としてのキリストの突然の顕現の幻の理解こそが、ダニエル（およびダニエルによって表される者たち）を、キリストのかたちへと変えた。「終わりの日に神の民に起こること」は、1840年から1844年のミラー派の歴史、また1844年から1863年のミラー派の歴史によって表されている。一方の者たちは反逆してその幻から逃げ去り、他方の者たちは信仰によってキリストに従い至聖所へ入り、天にあるところで彼と共に座する。

しかし、神の終末の民がキリストの御姿に変えられるという幻をガブリエルが解き明かすとき、彼は世界の外的な歴史を示す。ダニエルのキリストに関する幻は、十四万四千人の封印の時の外的な歴史として、ガブリエルによって解釈された。ガブリエルの解釈において2001年9月11日の歴史に至るとき、16節の「日曜法」に先立つものとして強調される歴史は、10節で「要塞」として表される理解の鍵によってのみ認識される。2001年9月11日、あらゆる幻の効力が、車輪の中の車輪のように展開し始めた。

主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、イスラエルの地で彼らが言っている『日は長引き、すべての幻は外れる』というあの諺は何か。だから彼らに告げよ、『神である主はこう言われる。わたしはこの諺をやめさせる。イスラエルではもはやこれを諺として用いない。むしろ彼らにこう言え。「日は近く、すべての幻の成就も近い。」』イスラエルの家のうちには、もはやむなしい幻も、へつらいの占いもない。わたしは主である。わたしが語れば、わたしの語る言葉は成就し、もはや引き延ばされることはない。反逆の家よ、あなたがたの日に、わたしは言葉を語り、それを行う、と神である主は言われる。」さらに主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、見よ、イスラエルの家の者たちはこう言っている。『彼が見る幻は多くの日の後のことであり、彼は遠い時代について預言している。』それゆえ彼らに言え。『神である主はこう言われる。わたしの言葉は、もはや一つとして引き延ばされない。わたしが語った言葉は行われる。』と神で

ある主は言われる。」 エゼキエル書12章21-28節

その歴史において、「車輪の中の車輪」のように回転している数々の預言の車輪のうち、啓示は、終わりの時代の預言を研究する者たちに、彼らの永遠の運命がそれによって定められる車輪が一つあることを告げている。行に行を重ねて、その車輪はまた、ダニエルが見て彼をキリストの御姿へと変えた幻でもなければならぬ。というのも、それこそが、終わりの時代に神の民に何が起こるのかを明らかにする幻だからである。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してくださった。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

「獣の像の試み」として特定される試練には、二つの側面がある。それは、預言の研究者に対し、日曜法に先立って、合衆国における教会と国家の結合、すなわち獣の像の形成を認識することを要求する試練である。またそれは、ダニエル、あるいは逃れた者たちによって表される人々の内に、獣の像かキリストの像かのいずれかを生じさせる試練でもある。その分離は、それらの処女たちが、ダニエルがそうしたように、「この大いなる幻を見る」か、それともその幻から逃れるかに基づいている。その大いなる幻を見るための鍵は、「要塞」という語によって表されている。

次回の記事でこの研究を続けます。

ヨハネに教えを授けたその力ある御使いは、ほかならぬイエス・キリストご自身であった。右足を海に、左足を陸地に置いておられることは、サタンとの大いなる闘争の終幕において彼が担っておられる役割を示している。この姿勢は、全地に対する彼の至高の力と権威を示している。この闘争は時代を経るごとに一層苛烈で決然たるものとなってきており、闇の勢力の巧妙な働きが極みに達する終幕の場面に至るまで、その傾向は続くであろう。サタンは悪しき人々と結託し、真理への愛を受け入れない諸教会と全世界を欺くであろう。しかし、その力ある御使いは注目を求める。彼は大声で叫ぶ。彼は、真理に敵対するためにサタンと手を結んだ者たちに、その御声の力と権威を示されるのである。

この七つの雷が声を響かせたのち、その小さな巻物に関して、ダニエルの場合と同様の命令がヨハネに与えられる。「七つの雷が語ったことは封印せよ」。これらは、やがて順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。ダニエルは終わりの日に自分の受ける分に立つ。ヨハネはその小さな巻物が封印を解かれているのを見る。そのとき、世界に告げられる第一、第二、第三の天使のメッセージの中に、ダニエルの預言はしかるべき位置を占める。小さな巻物の封印が解かれたことは、時に関する

メッセージであった。

ダニエル書と黙示録は一つである。一方は預言、他方は啓示であり、片方は封印された書、もう片方は開かれた書である。ヨハネは雷鳴が語った奥義を聞いたが、それを書き記してはならないと命じられた。

「七つの雷鳴のうちに表された、ヨハネに与えられた特別な光は、第一天使および第二天使の使命のもとに起こる諸事件の描写であった。」『セブンスデー・アドベンチスト聖書注解』第7巻、971。